語　源　再　考

—辞典等に見る語源説明をめぐって—

(1)

河　野　庸　二

緒　言

語源学は生やさしい学問ではない。正面きって語源学に取り組むことは至難の技であり到底筆者の力の及ぶところではない。語彙を日常語，俗語，外来語等で比較的扱いやすいものに限定して，世間一般に流布している語源説を今一度整理しなおして，再検討しようというのが本稿の意図である。

執筆するに当たって，当然のことながら，個々の語彙について幾種類もの辞書，参考書の類を繙きその記述内容を比較検討することが多かったが，Aの辞書にない記述をBの辞書が補い，A，Bには見られない記述をCの参考書に見出すという具合に，ことばの実像を正しく把握するためには，可能な限り多くの文献を調べることが大切であることを，改めて痛感させられた。

序　説

森鷗外の自伝的小説「キタ・セクスアリス」の中に次のような一節がある。

> 寄宿舎では，其日の講義のうちにあった術語だけを，希臘拉甸の語原を調べて，赤インキでペエジの縁に註して置く。教場の外での為事は殆それ切である。人が術語が覚えにくくて困ると云ふと，僕は可笑しくて溜まらない。何故語原を調べずに，器械的に覚えようとするのだと云ひたくなる。

ところが，従来わが国の辞書類は語源を載せないものが一般であった。英和辞典，古語辞典，漢和辞典みな然りである。積極的に語源説明を取り入れたのは，国語辞典としては，「言海」，さらには「大言海」が最初であろう。事実，大槻文彦のこれらの労作は，語源研究の進んだこんにちから見ればナ

ンセンスの記述を含んではいるものの，オリジナルな辞書のよさを端的に示すものといえよう。国語学者大野晋氏も司馬遼太郎氏との対談の中で，「私はわからなくなったら『大言海』を見るんです。」と語っている。[1] かつて一般に広く普及した辞書「広辞林」，さらにこんにち広く利用されている「広辞苑」もごく一部の項目に限って語源もしくは語源説を載せている。しかし，残念ながら，これらの辞書に見られる語源説明には，旧来の民俗語源的なものも少なくないのである。近年ようやく学者諸氏による語源研究の成果があらわれはじめ，世間一般の語源学に対する関心もとみに高まって，その風潮を反映してか，最近出版された各種の辞典類の中には語源説明にかなりの比重を置くものが少なくない。日本の辞書もどうやら西洋の水準に近ずこうとしているのはよろこばしいが，不正確な記述，辞書間の不統一等，あいかわらず不完全な説明や，研究不足としか思えないような記述さえ少なからず見出せるのである。中島文雄氏がかつてある随想の中で次のような主旨のことを書かれたことがある。

> （英語教育も進んだようでいて，今だに英語の参考書の中に，臆面もなく，「英語では天気が悪く，たとえ雨が降っていても，『お早う』は **'Good morning'** という。」などと書いているものがある。**'Good morning'** は **optative** である。祈りなのである。だからむしろ天気が悪ければ悪いほど **'Good morning'** と云わねばならないのである。）

言葉の正しい由来をふりかえることの大切さを思い知らされる話である。

「ブリタニカ国際大百科事典」[2] 小項目の部「ジプシー」の項に次のような記述が見られる。

> ジプシーの語源はエジプシャンであるとされているが，チゴイネル（ドイツ），ボヘミアン（フランス），ヒターノ（スペイン）など種々の呼称があって一定しないが，みずからはロム（人間の意）と称している。

たしかに **gypsy** は **Egyptian** の転化であろうがヒターノ **gitano** も **Egiptano**（=**Egyptian**）からの転化なのである。（<**(E)gy(p)tano**）。これらはともに彼らの肌色が黒いためにエジプトあたりから来たものと誤解されたことによる呼称である。語源的な知識なしに上の記述を読んだとすると，「ジプシー」と「ヒターノ」，とはまったく関連のない別個の呼称としか思えないで

あろう。「ボヘミアン」という表記も英語式の発音であるからこの場合適切ではない。フランス語式に「ボエミアン」と記すべきであろう。ちなみにこの呼称は，ジプシーたちが西ヨーロッパに達するのに，チェコスロバキア西部のボヘミア地方を経由したため，この地方が故郷だと想像されたことに由来する。なお，ジプシーを表わすもう一つのフランス語のジタン *gitan* はスペイン語の gitano からの借用語である。先年「ル・ジタン」（*Le gitan*）という題名のフランス映画が公開されて，この語はわが国でも一時的に脚光を浴びた。

誤訳にまつわるエピソードは跡をたたないが，外国語学の不完全であった当時の実情をしのばせる1例を上げることにする。

> …まあなんでもこなしますけれど，小学校の場合のスタンダードナンバーいいますと，低学年でヨナーソンの「カッコウワルツ」カールネッケ作曲「クシコスの郵便馬車」ミヒャエル作曲「森の鍛冶屋」……
> （野坂昭如「軍歌」より）

「クシコス・ポスト」あるいは「クシコスの郵便馬車」というタイトルはこのように今さら訂正しょうのないほど定着してしまっているが，とんでもない誤訳なのである。近年になって出た，描写音楽を集めたレコードのジャケットには次のような解説が出ている。[3]

> 馬のことを，ハンガリー語でクシコス（csikos）といいますが，正確な発音ではチコシュが近く，クシコスではまちがいなのです。つまり，郵便馬車のことです。

思うに，ハンガリー語などは詳しく調べるにも方法のなかった時代，最初の訳者が苦心の末 csikos をローマ字式に読んだうえ，さらにこれを地名であるかの如くに解釈したのであろう。「ストリンドベルグ」が「ストリンドベリ」と表記が改まっても「アンデルセン」が「アナスン」には改められないように「クシコスの郵便馬車」は今後も誤訳のまま通用するであろう。

比較的新しい俗語等で，辞書が語源未詳としてサジを投げてしまっている語に対して案外簡単に解明の糸口を見つけられそうな場合もないではない。「マリアッチ」（mariachi）という項目を載せている辞典（英米の辞書，辞典類，英和辞典，国語辞典，さらにスペイン語辞典を含めて）は皆無に近い。も

っともこの単語は Mexican Spanish であるから無理もないが，情報量の多いわが国ではすでにれっきとした外来語として数えられても当然な言葉である。またイギリスの場合はいざ知らずメキシコと国境を接しているアメリカの場合日本におけるよりも知名度の高い言葉であろうことが想像される。したがってこの語が辞書の中に登場するのは遠い先のことではあるまい。ところで最新の外来語辞典である「外来語の語源」（角川小辞典）[4] にも「マリアッチ」の項はまだ設けていないが，「アメリアッチ」(ameriachi) の項があって，その語源説明は次のようになっている。

> 語　源 ←American〔アメリカの〕＋mariachi（マリアッチ）＜メキシコ・スペイン語．語源未詳＞.

ところがかんじんの「外来語の語源」と銘うっている本が語源未詳と決めつけているこの「マリアッチ」に関しては「新音楽辞典」（楽語）[5] の中にかえって信憑性の高い語源説明と簡潔で要を得た語意説明が出ているのである。

> mariachi（西）メキシコの民俗的アンサンブル。従来は野外パーティのダンスの伴奏をしたり，しばしば結婚式にも用いられたことから，この呼称はフランス語の＜*mariage* 結婚＞に由来すると思われる。（下略）

発音の点から考えてもフランス語のマリアージュからメキシカン・スパニッシュのマリアチ（「ア」にアクセントを置いて発音するならば「マリアッチ」という表記よりもこの方が原音に近いであろう）への転化はほんの一歩であって，いわばレモネードからラムネへの転化に等しいのである。発音面だけから考えてもラムネの語源が lemonade であることが確実であるようにマリアッチの語源が *mariage* であることはほぼ間違いないといえるのではなかろうか。根気強く文献をさがせば語源解明の糸口の見つかる語はまだまだありそうな気がする。

先年，シンデレラ物語の成立について何冊かの書物で調べた折，学術書の記述にも案外不正確な個所があったり，あることがらに関する記述の内容が書物によってまちまちである場合が多いことに気ずいた。土居光知著，「神話，伝説の研究」[6] 第二章の，シンデレラ物語の梗概をのべた個所には，

> それで彼女は「灰かぶりのエラ」――シンデレラと呼ばれていた。

という記述があるが，学問的に大いに物議をかもしそうな一節である。そもそもシンデレラ（Cinderella）という名前はシャルル・ペロー版のシンデレラ即ちフランス語のサンドリヨン（*Cendrillon*）を英訳する際に造られた語であるから（Cinder＋-ella《＝feminine diminutive》），「灰まぶれさん」ほどの意味である。

シンデレラのはくガラスの靴に関しても2つの説が存在してまっこうから対立していることを知った。すなわち「ガラスの靴」は，Charles Perrault の創案によるものとする説と，英訳者の誤訳によって生じたとするいわばけがの功名的異説である。

> The glass slipper has been conjectured as a fur or sable slipper, supposedly from pantoufle *de vair* not *de verre*. Perrault's text of 1697 has "*de verre*", which is more in keeping with the story.[7]

> In Perrault's story the slipper was of fur, but the English translator confused *vair*, the French word for fur, with *verre*, the French for glass. That is why our Cinderella wears glass slippers. Glass slippers usually are prettier than fur ones, so the mistake was a good idea after all.[8]

ちなみに *vair* は中世のフランス語で北国産リスの銀ネズミ色の毛皮で，これは王公貴族専用のものであったという。[9] また *vair* と *verre* の発音がともに〔vɛ：r〕である点もいっそう話をこじらせている。いちいち例を上げないが，どの本の記述も大同小異で上に引用した2説のうちいずれかに当てはまる。となると結局は今一度ペローの原本にまでさかのぼらねば真相はわからないというわけである。

何はともあれ，一冊の本にたよらず，できるだけ多くの書物で調べることによって，より正確な知識が得られるのはもとより，時としては意外な事実を発見することもあり得るのである。

以下，本論において各々の語を取り上げて論ずることになるが，順序はまったく at random になることをあらかじめことわっておく。

southpaw（サウスポー，左腕投手）

野球用語の中にはいろいろとおもしろい表現があるのだが，ことに south-

pawという俗語は早くから筆者の注意を引いたものであった。paw（犬，ねこなどの足）が俗に人間の手を表わすのはわかるとして，問題は方位を表わす語である south がなぜ「左」の意味になるかという点にある。国語辞典の中では「サウスポー」の語源について「広辞苑」が次のような説明を載せている。

> サウスは南部，ポーは腕の意。アメリカ南部出身の大リーグ所属投手に左利きが多かったから。

たしかにこれが一般に流布しているサウスポーの語源説の1つなのであるが，いかにも伝説めいていて簡単には納得しかねるところがある。一体，辞書というものに絶対の権威を期待するのは無理なことであるから，一冊の辞書の何万，何十万という項目の中には弱い部分があってもおかしくはないと思うのであるが，southpaw の項に関しては他にもより信頼すべき説がないわけではないので，いっそうまずく思われるのである。「サウスポー」の語源説明に関する限り，「広辞苑」ともあろうものがという感を禁じ得ない。

ところでかんじんの英語辞典の方はどうであろうか。かつてわが国の英語辞典の中にはこの語の由来を説明しているものが皆無であった。すべて俗語というレッテルをはって片ずけてしまっていたのである。初めて southpaw に対して語源説明を載せた小英和は，筆者の知る限りでは「新クラウン英和辞典」[10] であって，その説明の要旨は次のとおりである。

> 教会の祭壇から見て左側が南に当たるから south に「左」という意味を生じたという。paw＝hand。

この説明も，いかにも日頃野球とは無縁な学者の説という感じであまり説得力のあるものとはいえない。筆者はこの説明を初めて読んだ時以来，教会と野球とがどう結びつくのか，つまり教会の方位がはたしてこれほどまでに日常生活の中にとけ込んでいるものだろうかという疑念をいまだにぬぐい去ることができないのである。ところでこの説の出所となったと思われるのは Webster の辞書[11] である。同辞典の southpaw の項に〔²south＋paw〕とあるので ²south の項を調べると

> situated in the direction of the right side of a church from the nave

toward the altar or chancel.

という説明が見られる。たじかにわれわれは方位を表わす場合には「向かって右(左)」のような云いかたをする。ただし教会の場合はウエブスター辞典が記すとおり,「(祭壇から見てではなく)祭壇に向かって右(左)」というのが妥当ではないかと思われる。結局ウエブスター辞典のいわんとするところは,祭壇に向かって右が南なら祭壇から見れば左が南だということであろうが,どうもこじつけのような感じがして納得しがたい。

ところが *Collier's Encyclopedia*[12] の Baseball の項所載の BASEBALL GLOSSARY には southpaw の項があって(英,米,日の各種の百科事典に当たってみたが,たとえ glossary は載せていてもサウスポーの語源に言及しているものは他になかった)まったく無造作にこう記している。

> A left handed hitter or thrower, so called because baseball diamonds are usually built with home plate to the west and second base to the east to keep the setting sun out of the batter's eyes. A left handed pitcher would be using the arm on his south side.

まったく疑念をさしはさむ余地のない明快な説明である。これが語学辞書ではなく百科事典に書かれていることに注意したい。つまり執筆者は語学者ではなく,少なくとも野球に精通した人にちがいないのである。しかもこれは語源説としてではなく,必然的な事実として書かれているのである。さらに E Partridge のスラング辞典[13] の補遺には次のような記述が見える。

> An American correspondent of Mr John Moore's has sent him this convincing explanation. 'On regulation baseball fields, the batter faces East, so that the afternoon sun won't be in his eyes; the pitcher, therefore, must face West, which in the case of the left-hander puts his throwing arm and hand (or "paw") on the South side of his body.'

ここには,実際の野球のゲームとは縁がないために解明の糸口がつかめずに苦しんでいたイギリスの学者が,野球とは親しい関係にあるアメリカの民間人から教えられて欣喜するありさまが 'convincing' の1語からも読みとれ

そうである。

なお「カレッジクラウン英和辞典」[14]は旧版の（南部出身者に多かったところから）という「広辞苑」と同系統の説明を改めて，第2版では，

> 1885年ごろ Chicago のある球場で pitcher が西に向かって投球し，そのきき腕の左腕が南側に当たったから。

というかなり具体的な説を載せた。既述の「新クラウン」の説とまったく異なるのは編者がちがうから当然といえるのかもしれないが，同じ出版社から出ている辞書がこれほど相反する説を掲載しているというのもおかしな話である。「カレッジ・クラウン」の説の難点は「pitcher が西に向かって投球した」のがいかにも偶然のできごとであったかのような書きかたになっていることで，これまた野球とは縁のうすい学者らしさが感じられるわけである。

以上のようなわけで southpaw の語源説は，机上の学問と実地の体験との相互関係を端的に示す好例ではなかろうか。ちなみに，「公認野球規則」には，「本塁から投手板を経て二塁に向かう線は，東北東に向かっていることを理想とする。」という1項がある。真東でなく「東北東」としてわずかに北に寄せてあるのは，思うに野手のことを考えての配慮であろうか。野手といえども西日をまともに受けては守りにくいのはいうまでもない。プロ野球においては今や夜間試合が主体になってしまっているが，day game で，1試合だけ行われる場合には，プロ，アマチュアの別なく午後行われるのが普通である。アメリカの大リーグの場合も初期においては当然同じような状況であったと考えられる。したがって初期の公式野球場はおそらく日照をじゅうぶん考慮して建設されたことであろう。ところが球場というものは運営上ネット裏に近いあたりに正門を設けるという事情もあり，そうなると当然外部の道路の所在とも関連してくる。道路事情のきびしい日本の野球場の中には，日照をまったく度外視したものはないまでも，必ずしも理想どおりの方位になっていないものも少なくないのである。筆者が北九州市の小倉球場において実地に測定したところでは，「本塁から投手板を経て二塁に向かう線」は真南に向かっている。

sabotage（サボタージュ，怠業）

「サボる」の語源となったフランス語の *sabotage* について「広辞苑」

(第二版)[15] は,

> 二十世紀初め，フランスで争議中の労働者がサボ（木靴）で機械を破壊したことから

という第一版にはなかった注を新たに書き加えた。一方「ブリタニカ国際大百科事典」[2] 小項目の部，「サボタージュ」の項には,

> その語源は「木靴 *sabots* をはいているように働く」にあるといわれ，「怠業」と訳されている。

とある。つまりここにもまた2つの説の対立が見られるわけであるが，前者が従来の俗説で，後者の方が再検討された新説とする見かたができそうである。Columbia Encyclopedia[16] にはその語源について

> 〔F., *sabot* = wooden shoe ; hence to work clumsily〕

と記しているが，いくぶんニュアンスのちがう書きかたをしている辞書もある。*The New Grolier Webster International Dictionary*[17] によれば,

> 〔Fr., the making of sabots, the doing of work quickly and badly, the intentional garbling of work by a printer, sabotage, <*sabot*〕

上のとおりである。ところで「スタンダード仏和辞典」[9] に載せる sabotage の語意は次のとおりである。

> ①木靴作り．②〔鉄〕（レールをはめ込むため）枕木に斜めに切目をつけること．③(a)粗製濫造．(b)サボタージュ，怠業.

したがって既述の「木靴をはいているように働く」が 'to work clumsily' に，また 'the doing of work quickly and badly' がまさに「粗製濫造」に相当するといえよう。単語としての *sabotage* は動詞 *saboter*（木靴をかたこと踏み鳴らす。木靴を作る。枕木に斜めに切目をつける。（仕事を）ぞんざいにやる等々。）の名詞形である。

「外来語の語源」[4] では，語源の方は「フランスで労働者が木靴を投げ込んだり，木靴でたたいて機械を壊したことに始まるという」として旧来の説を採用しているが，「参考」として次のような記述を載せている。

> 英語などの sabotage は単なる怠業でなく，機械や施設などを破壊損傷して生産を遅らせることをいう。日本のサボタージュは米語の slow down，英語の go-slow，ca'canny にあたる。

この記述は英語等における sabotage の定義を適確にとらえたすぐれた説明と思うが，そもそも sabotage は暴力的行為として始まったのであろうか。それとも消極的な抵抗の姿勢である「怠業」が本来なのか。その辺の事情について諸家の説を引用することにする。Morris の語源辞書[18] には次のような記述がある。

> (sabotage) derives its meaning of deliberate delay or obstruction of work from some use of sabots for this purpose. We have never been much persuaded, however, by the story that workers threw their wooden shoes into factory machinery to cause damaging delays. You see, wooden shoes have traditionally been worn by peasants, rather than by city-dwelling factory workers. So it seems more likely that the first instances of sabotage were peasant revolts against oppressive landowners—revellions or "strike", if you will, that might well have taken the form of workers trampling down the landowners crops.

Morris は *sabotage* が *sabot* の派生語であるところから，「意図的な作業の遅延もしくは妨害のためにサボを何らかの形で使用したことに由来する」と説きながらも，かの俗説を否定して，きわめて素朴な形の農民一揆をその原形として推定する。理論的にはきわめてもっともであるが，あくまでも臆測の域をこえないであろう。

Grolier Universal Encyclopedia[19] の記載するところはこうである。

> The term "sabotage", which came into use in the latter part of the 19th century, derives from the French word sabot ("wooden

shoe"), with its suggestion of slow steps and clumsy movements. Even prior to the use of the term, however, acts of sabotage were not uncommon during the period of the industrial revolution.

つまりここでは「何らかの形でサボを使用した」のではなく，木靴の「のろい歩みとぎごちない動きからの連想」によるとして，さらに「怠業の行為自体は sabotage という用語が登場する以前からさかんに行われていた」と説かれているのである。

また Isaac Asimov はその著書 *Words from History*[20] の中に sabotage の章を設定して，例の俗説の紹介したのち次のように述べている。

Much more likely, the word comes from the feeling on the part of the better classes that the wooden-shoed peasantry were naturally clumsy. Any clumsiness was therefore "sabotage" ; that is "peasantness".

さらにアジモフは sabotage のもつ暴力的，破壊的な行為という意味あいは20世紀初頭フランスの鉄道で起こった事件をきっかけとすると説いているが，*Encyclopaedia Britannica*[21] にもそれと大同小異の記事が見られる。

The word became famous in the French railway strike of 1912. The embittered workers deliberately damaged the railways by cutting through the wooden braces (also called "*sabots*") holding the rails in place. This literal sabotage made the word popular in time for it to be used with an even more savage application. [20]

The modern conception of sabotage traces from the French railway strike of 1910 when workers cut wooden "shoe" (*sabots*) that held the rail in place.[21]

要するに *sabotage* は「サボする」ことであり，したがってそれは「サボを作る」ことでも，「サボを壊す」ことでもよいわけである。

外来語の常で日本におけるサボタージュは「サボる」の語源となったことからも明らかなように，もっぱら「怠業」の意味で用いられているが，一方

アメリカでは戦時における破壊，妨害行為としてのサボタージュがもっとも普遍的な用法であるという。その辺の事情もアジモフの著書に詳しい。

> In World War I, the fighting was long and unprecedentedly fierce. French and Belgian nationals in areas occupied by the Germans fought back by surreptitious damage to equipment and material useful to the enemy soldiers. And thus began sabotage in wartime, the use of the word that is perhaps most familiar to us now.[20]

したがってこの場合のサボタージュもその目的は敵側に物理的損害を与えることよりも，むしろ敵の戦闘意欲を喪失させることに主眼が置かれているようである。

注

1．大野晋編「対談　日本語を考える」中公文庫（中央公論社，昭和54年）
2．（ＴＢＳブリタニカ，昭和49年）
3．少年少女世界の名曲（学習研究社，昭和48年）
4．吉沢典男／石綿敏雄著（角川書店，昭和54年）
5．（音楽之友社，昭和52年）
6．土居光知著（岩波書店，昭和48年）
7．Ebenezer C. Brewer, *Dictionary of Phrase and Fable, Revised by Ivor H. Evans,* (*Cassel,* 1970)
8．*The Book of Knowledge,* (Grolier, 1966)
9．鈴木信太郎他８名著，「スタンダード仏和辞典」，（大修館書店，昭和43年）
10．（三省堂，昭和39年）
11．*Webster's Third New International Dictionary,* (G.&C. Merriam Co., 1966)
12．(Crowell-Collier Educational Corporation, 1970)
13．*A Dictionary of Slang and Unconventional English* (*Vol. II: The Supplement*), (Routledge & Kegan Paul LTD, 1970)
14．第２版，（三省堂，昭和52年）
15．（岩波書店，昭和45年）
16．Columbia University Press, 1963)
17．(Grolier, 1973)
18．William and Mary Morris, *Morris Dictionary of Word and Phrase Origins,* (Harper & Row, 1977)
19．(Grolier Incorporated, 1966)
20．岩田一男編注，（弓書房，昭和51年）
21．(Encyclopaedia Britannica, Inc, 1970)